

コラム

八つあたり その2

私は本誌第74巻第2号に「鉄と鋼」の論文審査はオリジナリティの評価に徹するべきである旨のコラムを書きました。このコラムをコピーして、私共の学科の談話室に掲示したところ、2名の教官から早速反応がありました。後にはそれつきりです。これは当初から予想されていたことで学科には40名ほどの教官がいますが、この反応してきた2名に私を入れた3名は普段より札付きの非常識者として知られている人材で、賢い人は黙っているようです。ところが本誌第8号をひょいと見たら、コラム欄に神鋼鋼線工業の山岡さんが私のコラムの主旨に賛意を表されているではないですか。そこで俄然嬉しくなりまた書かせてもらいます。

さて、最近では若干下火になつてきましたが、一頃、創造性とか独創性が声高に言われ、私も御多聞に洩れずオリジナリティとかについてわめいているわけです。しかし、良く考えてみると「独り創める」という精神は日本ではもともと存在しないか、あるいは最も嫌われてきたのではないかという気がします。とくに企業も大きくなると、根底には「和」の精神があり、独創技術もチームワークの中で生まれるから「天才、奇人はいない」ということになるのでしょう。これは大学ですらも例外でなく、和の精神を欠くものはいつの間にか疎外されてくるようです。この精神は論文を書く時も審査する時も無意識的に働いているようです。前者においては、次に示すように論文の著者数が多くなる傾向に表れており、後者においては論文の良悪の判断を明確化することを避ける傾向に表れているようです。

図1と2にそれぞれ「鉄と鋼」および米国の「Metallurgical Transactions」(AおよびB)に1年間で掲載された論文(技術報告も含み黒塗りで示す)の著書数の頻度分布を示し、10年前(1978年)と一昨年(1987年)の2年間分と比較してあります。これらの結果は両国の研究者の心理状態を明らかに表し

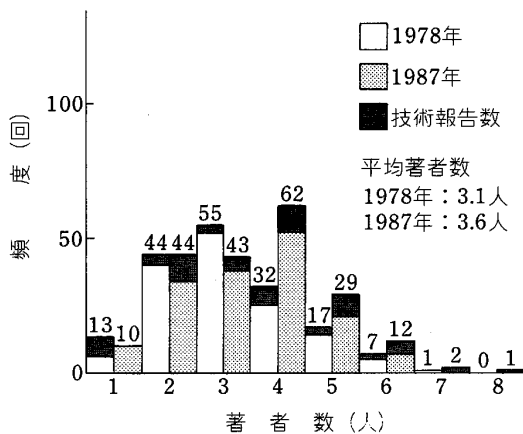


図1 「鉄と鋼」における論文著者数の分布 (1978年, 1987年)

ているようです。すなわち、1987年のデータで比べてみると米国では文字どおり「独り創めている」単著論文が14%あり、せいぜい2~3名の共著が大多数となつています。これに反し、日本では単著論文はわずか3%しかなく、4名以上の共著論文が何と54%を占めています。これぞ正しく和の精神の発露といえるのではないのでしょうか。なお、4名の共著が最頻度となつているのは、どうも教授-助教授-助手-大学院生という「おんぶ」に「だっこ」の姿を連想させて微笑を禁じえません。

これらの国よりさらに言えることは両国ともに10年前に比べると共著者の数が増える傾向にあることで、これは最近の論文の独創性が減つてきていることを暗示しているようです。なお、1987年の「鉄と鋼」における技術報告は40通で10年前と比べると増えています(1978年にも技術報告は25通ありますが、その内15通はその年の11月号における特集号「鉄鋼業における省エネルギー」で意図的に集録されたものです)。この原因ははつきりしませんが、少なくとも日本の鉄鋼製造技術の隆盛を反映していることは確かです。

ここで以上述べたことにつき誤解のないように付け加えたいことは米国の「Metall. Trans.」が優れて「鉄と鋼」が劣つていると主張したいわけではありません。両者に両国の研究者の心理の差異、あるいは両国の文化の差異を反映していることを指適したいだけです。ただ、論文に関係する人間が多ければ多いほどその思考や発想がぼやけてきて論文の面白味が失われてくるでしょう。少なくとも実際に論文を執筆している若い研究者にとっては「おんぶ」に「だっこ」している人々の名前が著者からとれたら志気も上がり活力もでてくると思います。もし、本誌が欧米流の独創性を標榜するならば著者数をなるべく少なくする方向を打ち出すのも一方でしょう。(長岡技術科学大学 田中紘一)

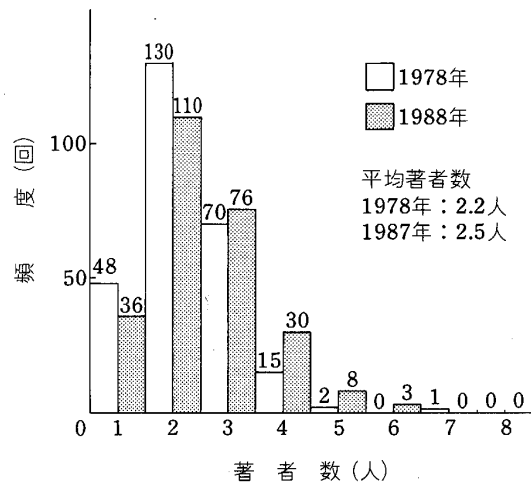


図2 「Metallurgical Transactions」における論文著者数の分布 (1978年, 1987年)